様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６２８４１３５

研究課題名（和文）北海道における先住民族の「知」の接合に関するアクション・リサーチ研究

研究課題名（英文）Research Project on Articulations of Indigenous Knowledge in Hokkaido (ARAIKH)

研究代表者
ゲーマン・ジェフリー　ジョセフ（Gayman, Jeffry Joseph）

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授

研究者番号：８０６４６４０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、最終報告書の編集にアイヌ民族当事者たちのインプット・フィドバックも含め、当事者たちの声を研究プロジェクトの中心に据えること＝アクション・リサーチ研究を目指してきた。先住民族による合同研究会を継続的に実施することにより、先住民族アイヌの「知」を規定する様々な要因を特定できた。また、先住民族同士の合同研究の在り様に関する斬新な理論・方法論を発見した。このようにアイヌ民族の「知」を規定する社会的構造と文化伝承のメカニズムの両面を同時に取り入れた研究として、本研究はこの国初と言って良いであろう。国際発表をしたところで、研究方法は称賛され、注目もされている。

研究成果の概要（英文）：This project represents the first collaborative conceptual research project between Ainu cultural activists and Japanese university researchers to be carried out in history. In addition to making significant progress toward clarifying a number of barriers to the Ainu peoples' access to their own Indigenous knowledge (IK), it was confirmed that the action research methodology of conducting joint workshop sessions between Ainu activists/cultural bearers and foreign Indigenous-identified scholar-activists was a strong catalyst to Ainu participants' empowerment and motivation to engage with Ainu IK.
Simultaneously, it was discovered that the emphasis on storytelling which spontaneously arose through these workshops was both a characteristic of, as well as a catalyst to, the various participants' knowledge/identities. The action research methodology employed, as well as the unique method of proceeding via storytelling, have garnered the attention and praise of international scholars.

研究分野：文化人類学

キーワード：アイヌ民族　アクション・リサーチ研究　先住民族　共同研究　先住民族の知識

１．当初の背景

アイヌ民族の社会では、植民地化の経験と同化政策の結果、本来の生業である狩猟採集が生きた文化としては存在しなくなった。また、アイヌ民族が集住し、従来のコミュニティの要素である家族間、世代間の頻繁な交流・接触を残しているコタン（村）がほとんど存在しないと言っても過言ではない。つまり、アイヌ民族で構成された家族が和人の入植者から構成された和人の市町村の中に点々と住んでいる状況である。従って、冠婚葬祭に伴い伝授されるような知識をはじめとして、共同体が健在の時に普段の生活の中で伝わる先住民族アイヌの「知」（知識、知恵、英知、価値観、世界観、情動）を成す要素がかなりな程度断片化されてしまった。平成 9 年に制定された「アイヌ文化法」が掲げる目標であるアイヌ文化の振興を果たし、このような生活文化の衰退傾向を堰き止め、逆転させようとするなら、先ず、そこに至らせしめた社会的過程を自覚し、現在のアイヌ社会やそれに伴う文化を規定している要因を可視化する必要があると思われる。同時に、アイヌの人々を取り巻く社会的条件に関する分析作業とともにアイヌ民族の「知」の伝承のメカニズムを明らかにする作業も急務である。研究代表者のゲーマンは十数年前から、単独でこのような作業に取り組んできていた。

他方で、札幌近辺の大学、例えば、苫小牧駒澤大学の北海道文化論コースや札幌大学のウレシパプログラムのように、アイヌの子弟のための高等教育プログラムが近年誕生している。また、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに先立って建設される国立アイヌ博物館に伴う教育・文化伝承者訓練プログラム（例えば、白老の民族博物館で行われている「担い手育成事業」）や北海道大学の大学院（文学研究科の予定）でのアイヌ関連のコースを順調に機能させるために、カリキュラムを組む必要性がある。

このような状況に応えるために、論理的な帰結としてそこで重要な課題として立ち上がるのは、一方の地方のアイヌ共同体で辛うじて生きた文化として残っているアイヌの「知」と、他方で学校教育の内容を代表している、「フォーマット化」された知とを上手に組み合わせることができるかという問題であろう。この二つの「知」の体系が接し、主従の関係性が調整される過程をここで「『知』の接合」と称する。

当研究の当初の背景として、アイヌ民族の「知」を規定する社会的構造と文化伝承のメカニズムの両面を同時に取り入れた先行研究は研究代表者の研究以外は皆無と言って良い。そこに当研究を行う重要性があった。またこの試みは同時に、植民地化の過程において、社会科学（人類学）が担った役目を自覚的に反省し、いかなる研究プロジェクトにおいても当事者である先住民族を研究の中心に据える倫理的な義務があった。つまり、当事者の立場を尊敬しないで、彼らを単なる研究の「対象」として扱わず、植民地化の過程を正当化するために調査結果を使わせた研究者の歴史的行為を振り返りそれを反省する必要がある。また、国際人権運動を掲げ活動に取り組む先住民族団体や、当事者の視点を最優先することを学問的理念とする先住民族学をはじめとする学門分野が目指す基準を最大限尊重する必要性を感じた。従って、アイヌ民族の権利を最優先するために、実際の研究手法として、地域参加型研究の方法が最適であると判断し、アクション・リサーチ研究を目指した。

２．研究の目的

以上の研究背景を踏まえて、研究の目的を以下のように設定した：

当研究の目的はアイヌの高等教育に携わっている教育・研究者（アイヌ、和人、外国人）が先住民族研究者と一緒になり、海外の先住民族文化復興運動の成功事例に精通している先住民族出身の教育者や研究者を北海道のアイヌの集住地に招へいし、アクション・リサーチ的なワークショップを通して海外の先住民族の知にまつわる言説や実践から学ぶ。それと同時に、現在のアイヌの「知」の構築の行き詰まりを克服するための糸口を体系的にしかも学術的に探り、また、そのプロセスを記録分析することにある。

３．研究の方法

本研究は、(1)「先住民族の教育のための世界大会」（World Indigenous Peoples Conference on Education=WIPC:E への出席および発表、(2)海外の先住民族教育・研究者とのアクション・リサーチプログラムの実施およびその記録、(3)これらを踏まえて、先住民族アイヌの個別の「知」の構築に影響する要因や構造の分析と解明、(4)これらを受けて、札幌近辺の高等教育機関における、地域に根差した教育研究プログラム開発の検討と実施という４つの研究を柱として、3 年間かけて実施するものであった。

ここで、先住民族出身の教育者や研究者と一緒に研究に取り組む理由として、１）研究代表者のゲーマンや研究協力者の lewallen は 10 年以上の先住民族研究の中で、そのような人たちとの人的ネットワークを有していたこと、２）海外では先住民族学の研究・教育取組みの歴史は長く、実際の成果を先住民族運動と連動しながら築き上げた経歴が

あり、ひいては社会的構造を分析するのに先住民族出身の教育者や研究者の知見が多大な示唆に富むことが予測されること、３）2013 年 9 月に北海道の平取町で行われた国際合宿の経験を踏まえて、「アイヌ」の独特な民族性を最大限引き出すことができると考えた。また参加団体や個人の活動発表の中でヘビーな内容が出てきた場合、それを癒しに変え、乗り越えるすべを海外の先住民族の活動家が提供できることを知り、当研究プロジェクトにもそのよう結果が期待できる自信があったからである。

本来、アクション・リサーチ研究とは当事者自身が抱えている問題に関する研究で、計画立案、実行、分析、成果発表の全ての段階において当事者が自主的に研究に関与する研究のことを指す。けれども、当プロジェクトにおいてはアイヌの「知」の構築・接合が「問題」であるという意識を明確にすることはできなかったこと、また、研究期間中にメンバ―の入れ替わりも見られた。そのため、「次善の策」として、途中から当事者たちが研究立案者のゲーマンが提示した広範囲なテーマについて自由に討論するというやり方に変えた。次善の策として、ここではアクション・リサーチの定義を「当事者自身が抱えている問題に関する研究で、分析、成果発表において当事者自身が自主的に研究に関与する研究」に再調整し、最終年度の終わりに発行した報告書をもってその原理が可視化され、当事者アイヌ民族の協議の下で元来の研究形態に戻すことができるかどうかを再検討した。結果として 2017 年 5 月の現在でもアクション・リサーチ研究は調整を続けながら継続されている。

実際の研究活動として、１）2016 年 5 月 18 日～25 日米国ハワイ州ホノルル市で行われた先住民族教育のための世界大会（World Indigenous Peoples’ Conference on Education）への参加・発表、２）ロシア連邦ペトロパブロフスク・カムチャツキー市でロシアのアイヌ民族と交流をするための訪問研修旅行、３）札幌における 5 回の研究合宿（内 2 回は国際研究合宿）、４）北海道の各地における 3 回の国際地域研究会、５）一回の国際地域調査訪問（先住民族出身の教育活動家とともに研究代表者が北海道静内地区を訪問）、および６）一回の地域研究会を行った。

なお、付しておくと研究会を札幌中心の国際研究会から国際地域研究会や地域研究会に切り替えた経緯は当初の研究計画に沿うものでもあるが、そうすることにより、当研究プロジェクトが注目している先住民族の「知」に関するディスカッションの成果が実に環境と密接に関わっており、当事者たちがリラックスできる、住み慣れている場が相応しいという判断から生じた選択であった。また、この「知」の伝承の有り様が確認できたことが研究成果の一つである。

なお、上記のプロジェクトの理念に沿い、三年間の活動をまとめた成果物の研究報告書（速報版、115 頁）以下「研究報告書」の編集に当たって、先住民族アイヌの参加者たちとの共同編集で進めたことも本研究プロジェクト特有の研究方法でもあるが、それは同時に特筆に値する、類を見ない歴史的な成果であることも付しておきたい。

４．研究成果

（１）Findings

研究会の自由な討論から自然発生的に出てきた具体的な話題について紹介する。アイヌ民族の「知」へのアクセスを阻んでいる様々な構造的要因（アイヌの民族的出自を肯定的に受け入れる環境形成を憚る要因として機能する差別、低所得、低教育歴、無関心、代表組織の体制の不備）が確認できた。

一方で、北海道内でもかなりの地域差も見られ、観光化や文化・言語復興の影響でアイヌ文化が地域の文化として端的に残っている地域の事例も明らかとなった。

更に、アイヌ民族の復興を目指す様々なアイヌの個人や集団、地域の自治体の方々、学者、海外の先住民族といったアクター達によって編み出されたネットワークの存在も「知」の全体像の重要な一因と思わせる証言も得た。

先住民族アイヌの「知」の性質を示し、また、和人との異文化間の軋轢の中でそれがどのように現れるかについての貴重な一次資料を得、研究報告書に掲載するとともにその分析によりアイヌ民族の「知」の性質や特徴をいくつか列挙できた。

アイヌ民族にとって、複数の地域の代表が集まり情報共有をするという活動は今回、有意義な活動となった。また、このような活動によりアイヌの状況が理解でき、それを肯定化できる海外の先住民族の元で共同作業として行われるとアイヌ民族にとってエンパワーメント効果があることを確認できた。

現在までにアイヌの人々の集まりでは頻繁に単なる鬱憤話や無力感につながる話が見られた。しかしそれを相対化し、植民地化や同化政策の中に位置づけ、歴史の負の遺産を克服するために対応策が必要な実態として積極的に位置づけることができる外部者（他の先住民族や、先住民族研究に取り組んでいる非先住民族の研究者）がいることや、活動実態が楽しく、前向きな雰囲気で進められたことが研究方法論の成功の鍵のようである。

特に海外の先住民族とアイヌ民族が共に共同研究に取り組む結果として、アットホームな楽しい雰囲気から生まれた「渋谷ストーリー」という「語りの共有」とでもいうべき先住民族特有の現象が確認できた。この「語りの共有」は、教育、福祉、や医療にわたるケアの分野に関する包括的（holistic）な視点を聞き出す手法として有効かもしれない、という興味深い成果を見出した。

また、研究会の自由な討論から自然発生的に出てきた課題の中に、マイノリティ支援や多文化共生、地域開発から、民族教育の支援と言った課題まで、多く含まれた。同時に、研究代表者のゲーマンはアイヌの研究協力者の二人から、それぞれに運動支援の依頼と地域起こし活動への支援の依頼を受け、アクション・リサーチの内容は一層具体性・応用性を帯びた。

一方で、このような活動に対する資金援助という点では、この効果にメリットを見出し、それを中心とした事業や調査研究プロジェクトに対し助成金を出す機関の有無が課題である。つまり、本研究に参加したアイヌの活動家は全員普通の仕事をもっている上に、様々な社会的活動（アイヌの文化復興活動、アイヌの権利回復活動）に携わっているため、多忙であるだけではなく、自らの活動資金を必要としている。その結果、無料で研究会活動に参加するわけにはいかないし、日本の 1/5 の面積を占める北海道の地方からの旅費もままならない。ましてや、北米からの海外ゲストの招へい費になると、高額になってしまう。

また、当研究が用いた方法論は問題がなかった訳ではなく、一年目の最後にアイヌメンバー全員が辞退したばかりではなく、最終報告書が執筆される前の最後の国際研究会の反省会において、「目的がまだ曖昧」という批判も聞こえた。これらの指摘を深刻に受け止め、真摯にそれらを踏まえて研究方法論を改善していく所存である。

（２）ロシアの訪問研修旅行の成果について

2 年度目の終わりに、研究プロジェクトとしてのニーズとアイヌ民族の伝統的なコミュニケーション・スタイルとの間の理想的なバランスを模索していた時期があった。その時に行われたロシア・アイヌの訪問調査は当初予定していなかっただけに実りあるものであった。「（クリルアイヌと名乗る）アレクセイ・ナカムラ氏の我々への反応もアイヌ民族の伝統からかけ離れたものではなく、非常に実りある訪問となった」（研究報告書、28 頁）。

つまり、海外の先住民族出身の活動家とともになり、先住民族の「知」へのアクセスを考えるという計画に、程度の差こそあれ、植民地化やグロバール化に伴い、異なる民族間であっても根底に共通する課題が横たわっている前提があり、共に虐げられた歴史を共有していることで出来る絆のおかげで、外部者の非先住民族との共同作業のみにより得られる成果とはかけ離れたレベルの成果があがることは合同ワークショップ形式の研究手法に期待された。

研究プロジェクト当初では、まさか国境によって分断されたアイヌ民族同士が一緒になり、今後のロシアのアイヌの文化伝承の課題について話し合うことができると想像すらしなかった。

が、訪問団のメンバーは再びカムチャツカを訪れるよう招待され、クリルアイヌに関する学術資料等の提供も約束され、今後の文化的交流は継続しそうである。「北海道のコミュニティ側も今回の訪問については満足している。カムチャツカ側ともその後の連絡がとれており、双方にとって益があったと判断してよいであろう」。（研究報告書、29 頁）

（３）　業績

WIPCE の会議でお世話になったハワイの先住民族出身の活動家を札幌に招へいし、国際集会を開催することにより、当研究プロジェクトは 3 年度目のはじめに予定していた国際シンポジウムを既に 1 年度目の終わりに実施している。また３年度目の 2016 年 7 月 14 日に、連携した取り組みである北海道大学メディア・コミュニケーション研究院共同研究助成事業「大学と地域の先住民族・マイノリティの対話と連携に基づいたエンパワーメントに関する研究」の主催で、行われた国際シンポジウム、「アイヌ民族の遺骨返還の意義と研究倫理―心のこもった返還のために―」に、本研究プロジェクトに参加している Bob Sam 氏を招いての国際シンポジウムを開催した。或いは、同じシンポジウムでも発表をし、2016 年 12 月まで研究代表者の研究室に 9 か月研究院研究員として所属した、ノルウェイのトロムソ大学院在籍のアイヌ民族出身の鵜澤加那子氏を交えた研究会「都市部に生きる先住民族–アイヌ民族からボリビア先住民族–」も連携企画として 2016 年 12 月 20 日に開催した。この他に 3 回の国際公開研究会を開催している。

出来上がった研究報告書は、日本国内外の研究者から高く評価され、目指される共同研究のモデルとしてとらえられている。アボリジニ出身で、現在、オーストラリアのメルボルン大学の副学長に相当するポジションにあるオーストラリアのアボリジニ出身の学者はこの活動をオーストラリアに紹介したい、と称賛した。また、台湾の原住民族研究

者の中でも、「心強い」体制と評価されたようであり、先住民族学を専門としている人たちの中では研究形態は高く評価されている。研究代表者のゲーマンはアラスカ大学で発表をし、好評を得た。一方で、Japan Focus 誌の特集に、ゲーマンは原稿の投稿に協力依頼を受けるなど、今後の学術論文の依頼にもつながりそうである。

但し、プロジェクトに参加しているアイヌ民族の参加者からは主体的に国際シンポジウムを開催したいという要望がまだ見られず、アクション・リサーチ研究に関するそのような催しを現段階で行う段階になく、研究代表者はそのような催しをひかえている。

最後に、研究プロジェクトで収集したデータを北海道大学の授業に活用され、プロジェクトメンバーがゲスト講師として授業に招へいされたりしている。学生、大学院生をアイヌのコミュニティにフィールドワークに連れていくという形で、研究成果が北海道大学のカリキュラムに還元され、アクションリサーチの中で得られた洞察が存分に教室にも活かされている。

<引用文献>

Gayman, Jeffry、萱野志朗、八重樫志仁、秋辺日出男、葛野次雄編『「北海道における先住民族の『知』の接合に関するアクションリサーチ研究」報告書』。「北海道における先住民族の「知」の接合に関するアクションリサーチ研究」(科研基盤 B、課題番号 26284135)発行（115 頁)。2017 年 3 月 31 日。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① ジェフ・ゲーマン、北海道大学での私の教育的取組みの中身と理念―アイヌ的な要素が沢山ある環境の中の先住民族教育学、異文化間理解教育、質的研究法―、北海道大学大学院教育学研究院紀要　第 127 号　査読無 2016 年 12 月、77－89 頁。

② ann-elise lewallen、”Clamoring Blood ”: The Materiality of Belonging in Modern Ainu Identity, Critical Asian Studies, Vol.48, No1, 2016, 50-76, 査読有 DOI: 10.1080/14672715.2015.1131400

③ 汪明輝，2016，Lalauya――二二八事件中的阿里山基地及其轉化，原住民族文獻，21 期，27-33、査読有。

④ lewallen, ann-elise, Human Rights and Cyber Hate Speech: The Case of the Ainu, FORUM: A Journal of the Asia-Pacific Human Rights Information Center, October 2015, 9-12, 査読無.

⑤ ジェフリー・ゲーマン, Development 概念の転換シンポジウムと私の研究の関連について―若干のコメント―, 子ども発達臨床研究, 北海道大学大学院教育学研究院付属子ども発達臨床研究センター　第 6 号（特別号）2014 年 12 月, 75-77 頁, 査読無。

⑥ Gayman, Jeffry. The Present and Future of Japanese Education: from the Perspective of an Educational Anthropologist. Proceedings, Global Trends in the Future Education, International Conference of the College of Education, 2014, Pusan National University, Pusan Korea. 27-35 頁, 査読無。

〔学会発表〕（計 18 件）

① Jeff Gayman, On Needs and Challenges of University/ Indigenous Community Collaboration: Reflections from Work at the Hokkaido University Research Faculty of International Media and Communication /Graduate School of Education. Invited Lecture delivered at the School of Alaska Native Studies and Rural Development, University of Alaska Fairbanks, USA, 10 April, 2017.

② Jeffry Joseph Gayman, On Needs and Challenges of Collaborative Ainu Research Initiatives: One Case of Collaborative Research with the Ainu of Japan, Joint Conference Between Hokkaido University and University of Helsinki, University of Helsinki, Helsinki, Finland, 2 March 2017.

③lewallen, ann-elise.Gendered Resistance: Japanese Assimilation Policy and Early Ainu Response in Hokkaido. Presentation to the Association of Asian Studies Annual Meeting, Seattle, USA, March 15, 2016.

④ 飯嶋秀治、真島一郎「破局の世界性と夜の思考－今日の山口昌男」にて趣旨説明+コメント、「ホームでの応答を意識して」課題研究懇談会、応答の人類学第 25 回研究会、北陸先端科学技術大学大学院東京サテライト Room A 、2016 年 2 月 22 日。

⑤ lewallen, ann-elise. Beyond the Nation? Ainu Empowerment through Social Media. Presentation to the Japan Society for the Promotion of Science US Alumni Association, Sacramento, USA,Nov.7, 2015.

⑥ 汪明輝，2015，〈台南市「札哈木」與鄒族關係歷史文獻與口傳歷史之對話〉，發表於「第十一屆『嘉義研究』暨市城隍廟建三百年國際學術討會」，2015 年 10 月 31 日，嘉義：嘉義大學蘭潭校區國際學院國際會議廳、台湾。

⑦ Wang, Ming-Hui, Richard Wright. The Status of the Tsou language of Taiwan, paper presented at Symposium on Language Shift in the Sinophone World, Seattle, Washington,USA Oct. 11, 2015.

⑧ Tibusungu Vayayana (Ming-Huey

Wang), Decolonization through Indigenizing Geographical Education: A Case from Taiwan ’ s Indigenous Cou People, Indigenous Resources: Decolonization & Development Conference, Nuuk, Greenland、October 10, 2015.
⑨ 汪明輝,〈原住民族生態智慧需要新的原住民族教育學制方得傳承：以鄒族教育學探討為例〉，發表於「第二屆河岸部落：大漢溪流域原住民族部落及其社會發展研討會」，2015 年 9 月 12 日，桃園：撒烏瓦知部落、台湾。
⑩ ジェフ　ゲーマン「アイヌ民族の先住民族教育の可能性と展望について」日本開発教育協会全国研究集会、札幌、北海道大学 2015 年 8 月 9 日。
⑪ Gayman, Jeff, Mark Hudson, ann-elise lewallen, Tatsiana Tsahelnik and Kouichi Inoue. Panel: Ainu Identity in Hokkaido and Beyond: Past, Present, and Future. International Council for Central and Eastern European Studies IX World Congress. Makuhari Messe, Chiba, Japan. August 4, 2015.
⑫ Gayman, Jeff, ann-elise lewallen, Kanako Wikstrom and Mai Ishihara. Defying Erasure: Indigenous Hybridity and Ainu Identity in Settler Colonial Japan. Native American and Indigenous Studies Association Annual Conference, Washington, D.C., USA, June 4, 2015.
⑬ Gayman, Jeff. On Collaborative Ainu Research Initiatives. Japanese Studies Association of Canada Annual Conference. Canadian Embassy, Tokyo. May 21, 2015.
⑭ 汪明輝,〈玩原住民科學？傳統原住民青少年成長的自然學習課程：以鄒族為例之探討〉，發表於「中國地理學會 2015 年年會暨地理學術研討會」，2015 年 4 月 18 日，臺北：國立臺灣師範大學,台湾。
⑮ Gayman, Jeffry. The Present and Future of Japanese Education: from the Perspective of an Educational Anthropologist. Global Trends in the Future of Education, International Conference of the College of Education, 2014, Pusan National University, Pusan Korea. October 24, 2014.
⑯ Ota, Mitsuru, Sayo Ogasawara, Kazumi Katayama, and Jeff Gayman. Trials, Tribulations, and Successes(?) of a Net-based Ainu Language Community, World Indigenous People's Conference on Education, Honolulu, Hawaii, USA,22 May, 2014.
⑰ lewallen, ann-elise. “ Global Cultures of Marginalization: Race, Gender, and Indigenous Women ’ s Empowerment. ” Presentation to UC-Center for New Racial Studies Conference, UC-Hastings, California, USA, May 16, 2014.
⑱ lewallen, ann-elise. Indigenous, Female, Other: Ainu Women’s use of Universal Language to gain Local Empowerment. Symposium: ” Interrogating Intersectionality in North East Asia: How do Race, Gender and Class work in contemporary Japan, South Korea, and China?” University of San Francisco, California, USA, April 3, 2014.

〔図書〕（計 5 件）
① lewallen, ann-elise, University of New Mexico Press, The Fabric of Indigeneity: Ainu Identity, Gender, and Settler Colonialism in Japan, 2016, 289 pages.
② （共著）アン・エリス・ルアレン、岩波書店、『人々の精神史』、2016、99~125
③ （共著）Gayman, Jeff, Osaka: National Museum of Ethnology,Social Movements and the Production of Knowledge, Body, Practice and Society in East Asia (Senri Ethnological Studies 91), 2015, 45-61.
④（共著）Gayman, Jeff, Japanese Studies Association of Canada, Japan and Canada in Comparative Perspective: Economics and Politics; Regions, Places and People, 2015, 152-169.
⑤ （共著） Gayman, Jeffry. J.Charlton Publishing, Native Nations: The Survival of Fourth World Peoples, 2014, 55-72

〔その他〕ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
ゲーマン　ジェフリー　ジョセフ（Gayman, Jeffry Joseph）
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：80646406

(2)研究分担者
飯嶋　秀治（Iijima, Shuuji）
九州大学・人間環境学府・准教授
研究者番号： 60452728

(3)連携研究者

(4)研究協力者
ルアレン　アン　エリス　（lewallen, ann-elise）
カリフォルニア大学サンタバーバーラ校・School of East Asian Studies・准教授
バヤヤナ　ティブスヌグエ （Tibusnugu ’e Vayayana）（汪明輝＝Wang, Ming-Huey）
台湾師範大学・地理系・准教授